

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
個人研究費
2011年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	経営学部	松 永 正 樹 印
研究課題	「秘密」を抱える部下と、その上司とのコミュニケーションの構造と関連要因	
研究期間	2011年度	
研究経費	495,000 円	

研究の概要（200～300字で記入、図・グラフは使用しないこと）

本研究は「対人コミュニケーション学」、「組織行動論」、「社会心理学」といった、人の社会行動とその背景にある諸要因、文化的影響、およびその効果についての検証を行う学際的研究である。国内の企業で働く社会人570人程度から上司一部下間のコミュニケーションに関する量的データを収集し、モチベーションと情報マネジメントに関する対人コミュニケーション理論の発展のための萌芽的研究を行った。具体的には、部下が上司に対して、何らかの「秘密」を抱えているとき、(1) どのようなコミュニケーションが上司一部下間の情報共有につながるのか、(2) それによって職場の生産性や人間関係、従業員の組織コミットメントにどのような影響があるのか、そして、(3) その際に影響を及ぼす組織、人間関係、あるいは心理上の要因にはどのようなものがあるのかを多変量モデリング分析を通じて検証した。

キーワード（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）

{ コミュニケーション } { 上司一部下 } { 組織行動 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、『モチベーションと情報マネジメントに関する対人コミュニケーション理論』が、日本の社会人における「上司一部下間のコミュニケーション」、特に、部下が上司に対して何らかの「秘密」を持っている際のコミュニケーションを研究する上で、どこまで適用可能であるのか、そして、どのような点で修正が必要なのかを明らかにすることを目標とした実証研究を行った。

モチベーションと情報マネジメントに関する対人コミュニケーション理論は、過去の研究においては、主に恋人同士の情報共有や秘密の保持といったプライベートな場でのコミュニケーションや、患者が医療関係者に対して自らの持つ情報をいかにコントロールするか、といった限定的な場面に適用され、その有用性が実証されている。しかし、「職場における上司一部下間のコミュニケーション」、しかも、職務上の問題のみならず、ワークライフバランスなど、一部プライバシーにも関連する広範な問題をもカバーする一般的状況において、どこまでこの理論が適用可能であるかについては未検証であった。本研究では、この理論に基づいたモデルを構築し、「部下が上司に『秘密』を自ら話そうと思うのは、どんな時か、どのような要因がそこには働くのか」という問いを中心とした一連の仮説群を検証した。

具体的には、部下のコミュニケーション動機に影響する要因として、単に上司との1対1での人間関係の良好さだけでなく、当該の上司を含めた職場全体の人間関係のあり方、部下個人の心理特性、そして、個別の『秘密』の内容によって変化する心理的コストと報酬感、上司とのコミュニケーションに関する自己効力感などによって、部下のモチベーションが大きく左右されることが確認された。同時に、これらの心理的、あるいは人間関係上の諸要因の影響に比して、性別や職位、勤務年数などの属性要因による影響はさほど大きくないことも示唆された。

さらに、これまでの研究では、部下が上司に『秘密』を、「話す」か、「話さない(秘匿する)」か、の二値モデルでしか検証がほとんど行われてこなかったが、本研究では、「直接上司に打ち明ける」「同僚に一旦話してみても、その反応を振り返りながらコミュニケーションのとり方を調整する」「メモ書きなどを用いて、自分の匿名性を維持したまま上司に『秘密』の内容だけを伝える」など、様々なコミュニケーション行動が存在することも明らかにした。これらの複雑なコミュニケーション行動のパターンは、前述の心理的、あるいは人間関係上の諸要因と相関しており、上司と好ましい人間関係にある者、構成員全体の雰囲気・人間関係が良好な職場に属する者、上司とのコミュニケー

研究成果の概要 (つづき)

ションに高い自己効力感をもつ者などは、比較的積極的に『秘密』を打ち明ける一方、たとえ上司個人とは(1対1での)良い人間関係をもっているにもかかわらず、職場全体に疎外感や派閥的な要素が存在すると、間接的なコミュニケーションを選ぶ確率が高まることも確認された。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

招待講演

- ・ 松永正樹 (2011年12月) 『部下が「秘密」を話そうと思えるのはどんな時か』
2011年度日本コミュニケーション学会中四国支部大会、広島大学 (広島)

学会発表

- ・ 松永正樹 (2012年6月予定) 『提案する部下、しない部下—職場における『Voice』行動に関する縦断的データの分析を通して—』 2012年度日本コミュニケーション学会年次大会、京都文教大学 (京都)
- ・ Matsunaga, M. (2012, November). *To “Voice” or Not To “Voice,” and How?: A Three-Wave Study on Employee “Voice” through the Lens of Theory of Planned Behavior. Paper submitted for presentation at the 98th annual convention of the National Communication Association, Orlando, FL.*
- ・ Matsunaga, M. (2012, May). *Employees in Japan want advice or empathy? A multi-level perspective on supervisor support, work-related outcomes, and the mediating role of leader-member exchange. Paper to be presented at the 62nd annual convention of the International Communication Association, Phoenix, AZ.*